大学生を対象とした心理専門職の職業倫理教育

講義と実習経験が患者とのかかわりに関する倫理的判断にもたらす効果について

○中村有里¹・武井祐子¹・水子学¹・高尾堅司¹・奥村由美子²

(¹川崎医療福祉大学医療福祉学部・²帝塚山大学心理学部)

キーワード: 職業倫理, 対象者との関係

The Recognition of Undergraduate Students about Professional Ethics for Clinical Psychologist
Yuri NAKAMURA¹, Yuko TAKEI¹, Manabu MIZUKO¹, Kenji TAKAO¹ and Yumiko OKUMURA²
(¹Kawasaki University of Medical Welfare, ²Tezukayama University)

Key Words: professional ethics, relationships with clients

目 的

職業倫理とは, “ある職業集団において, その成員間の行為や, その成員が社会に対して行う行為の善悪を判断する基準として, その職業集団内で承認された規範(金沢, 2006)”と定義されている。しかし, これは臨床場面で遭遇する倫理的要素を含む判断の難しい場面(倫理的困難場面)において, その基準への当てはめで, 倫理的に妥当な判断が下せるようなものではないため, 職業倫理教育の中で“「どれだけのことを考え, 何に気づけるか」を丁寧にみる”ことが, 倫理意識の基盤を形作る(慶野, 2010)”と言われている。そのための効果的な職業倫理教育として, “事例検討の形式や現場の実践的な問題を学ぶことを重視した取り組みが報告されている(慶野, 2010)”一方で, その効果の検証は十分ではない。

本研究では心理臨床の専門教育を受けている大学生を対象とし, 架空事例を用いた職業倫理教育と, 医療機関での実習経験が患者とのかかわりに関する倫理的判断にどのような効果をもたらすかを検討する。

方 法

【調査時期・対象者】2012年4月(講義前), 5月(講義後), 10月(実習後)の計3回, 医療機関での実習科目を履修している大学4年生23名(男性9名・女性14名, 平均年齢21.39歳(SD=1.16))を対象に講義内で質問紙調査を実施した。

【講義・実習】講義では「実習にかかわる倫理」というテーマで, 架空事例を用いた対象者との関係, 秘密保持についてのグループディスカッションを行った。また, 実習は精神科病院において5日間行われた。

【質問紙の構成】質問紙は精神科病院での実習を想定した患者とのかかわりに関する2場面を設定した。うち, 本報告では, 実習中に架空の患者Aから回答者である実習生へ贈り物が提案される場面を取り上げる。贈り物については, 『購入されたハンカチ』『手元にあった飴』『似顔絵』『一緒に作ったペン立て』『手紙』の5項目である。この場面は贈り物を受け取ることが患者の治療を阻害したり, 多重関係に発展する可能性を含んでいる。その倫理的要素への気づきをみるため, 各項目を受け取ることに「抵抗なし」「抵抗あり」「わからない」の3件法で回答を求め, 「わからない」は分析から除外した。

結 果 と 考 察

贈り物5項目全てにおいて, 講義と実習を経験することで, 「抵抗なし」から「抵抗あり」へと回答に変化が見られた。そこで, 講義と実習の経験による各項目を受け取ることに對する抵抗感の変化に有意性がみられるかどうかを検討するため, 調査時期を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。その結果, 『似顔絵』($\chi^2(2)=6.258, p<.05$, Nagelkerke $R^2=.145$)と『ペン立て』($\chi^2(2)=8.429, p<.05$, Nagelkerke $R^2=.145$)についてモデルの有意性が認められた。

『似顔絵』『ペン立て』を受け取ることにについては, いずれも講義と実習を経験することで抵抗感が増している(図1)。

『似顔絵』については, 実習後に比べ, 講義前において抵

抗ありのオッズ比は0.167倍であり, 有意性が認められた(Wald(1)=5.665, $p<.05$)。つまり, 講義前と比べると, 実習後は5.99倍(1/.167)程度, 抵抗感が増しているといえる。

『ペン立て』についても実習後に比べ, 講義前において抵抗感ありのオッズ比は0.118倍であり, 有意性が認められた(Wald(1)=6.836, $p<.01$)。つまり, 講義前と比べると実習後は8.47倍(1/.118)程度, 抵抗感が増しているといえる。しかし, 『似顔絵』『ペン立て』いずれにおいても, 講義後と実習後との間のオッズ比に有意性は認められなかった。

図1 3つの時期での抵抗感の変化

また, 抵抗感の変化に有意性が認められなかった『ハンカチ』『飴』は講義前から高い抵抗感が維持された。これら2項目は, 患者Aが購入したものであり, お金のかかった贈り物を受け取ることは倫理的要素が含まれると判断されやすかったと考えられる。

『似顔絵』『ペン立て』については, いずれも講義前と比べると, 実習後の抵抗感には有意に増していたが, 講義後と実習後の抵抗感には有意な変化は認められなかった。今回は全ての調査対象者が講義と実習を経験しているため, 実習のみによる倫理的判断の変化を見ることはできない。しかし, 回答者の多くが実習で倫理的困難場面に遭遇したことを報告しており, 講義によって, 実習場面での倫理的要素の気づきにつながり, さらに, 実習によって, 贈り物を提案する患者側の意図を考えられるようになるなど, 抵抗感以外の変数に効果が及んでいた可能性がある。今後は倫理的判断の背景を明らかにし, 教育による内的過程の変化について明らかにする必要がある。

引用文献

- 金沢吉展(2006). 臨床心理学の倫理をまなぶ 東京大学出版会
慶野遥香(2010). 初学者の倫理的困難場面における判断と気づきの検討 心理臨床学研究 28(5), pp. 643-653.
注) 本研究は, 平成23年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて実施された。